

体験 発表 酪農十年の歩み

郷 正 光

福島県石川地方は畜産が盛で農業経営上もつとも重要な位置を占め、その主体は馬産だつた。しかし農業生産力をより高めるには経済性の高い酪農を積極的に導入すべきだと考え、昭和二十二年同志と語り合つて酪農地帯としての建設方針をたてた。もともとこの地域は阿武隈川の上流で土壌は石灰質に富む良質な草生地帯で、農家耕作面積は田畑合せて平均一町二反であるから、飼料の自給対策を強化すれば酪農地帯として絶好の条件をもつている。

そこで酪農経営を推進する組織体系を整える一方、次のような酪農経営方針をたてて見た。

- ① 技術の普及改善
- ② 堆肥の増産と完全利用、特に牛尿の徹底的利用
- ③ 耕地の改良整備と農道の整備による畜力利用の徹底
- ④ 牛乳の自家飲用による食生活の改善と米の節約
- ⑤ 犢の販売による現金収入の増大
- ⑥ 余剰牛乳を工場に出荷して現金収入をはかる
- ⑦ 脱脂乳を利用して養豚、養鶏経営を

⑧ 協同組織を強化して酪農家を指導する
以上のようなものであつた。

飼料作物を徹底的に栽培

こうして村のそして石川地方の酪農を繁栄させることによつて自分の経営もまた生きるといふ信念で、自ら実践すると共に同志と手を握つてスタートした。

先ず私は次のことを経営改善の重点として実行した。

- ① 従来自給作物を粗放的につくつていた八反歩の畑に飼料作物の集約栽培を行う
- ② 水田の暗渠排水、耕地整理を行つて裏作を可能にし、レンゲ、青刈ライ麦の粗飼料を作つて経営を酪農に切替える
- ③ 厩肥を増産して地力の培養を行う
- ④ 畜力化を徹底して労力の節減を行う
- ⑤ 雑木林を開墾して耕地をつくり順次家畜をふやして行く——こととした

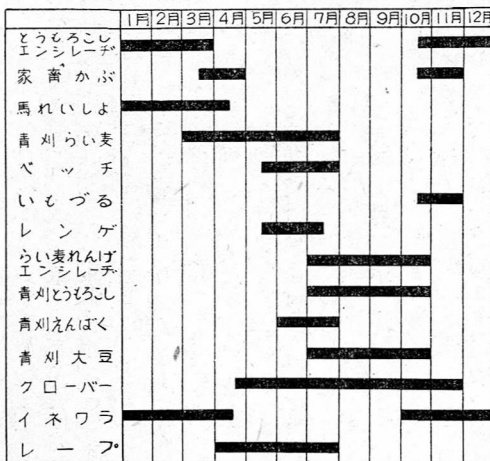
飼料 乳牛を飼つて採算をよくするにはエサと乳量とを直結させることが最も大切

であり、また困難なことでもあるので、この面の工夫に努めた。そこで二十二年、早速サイロ(直径五尺、深さ二尺)一基をつくり冬期間のエサにあて、夏のエサは暗渠排水を行つて可能になつた水田裏作に労力の一番かからないレンゲをつくつてサイロに詰込み、二八年からはライ麦を簡易播きしてレンゲの連作をさけ、更に三十年からは裏作にイタリアンライグラスをとり入れて乾草の不足を補つた。また北海道の酪農視察で赤クロバリの重要性とその真価を感じてからは輪作形態をとつて順次赤クロバリ畑をつくり濃厚飼料の代用と土地改良を行つた。

自給飼料は常に三種混合、つまり禾本科、荳科、十字科を牛に与えることが必要だと思ひ、二十五年に矢吹原経営伝習場の指導で飼料作物の六毛作をやつてみた。この結果は生体百二十貫の乳牛が一年の間、一日六升五合の乳を生産出来る蛋白質、可消化養分総量では一斗一升の乳を生産できることがわかつた。もちろん畑全体に行うことは労力の面でむづかしいので地力の維持増進を考慮しつつ順次進めた。

また二十八年からは県の営農試験地の代表担当農家となり、エサの自給度を高める研究を進めている。その結果は地力の維持ができる外、年間の飼料給与は非常にうまく行き、濃厚飼料の購入量をグンと減らすことが

第1図 年間飼料給与



できた。なお年間のエサ給与は(第一図)の通りだが、今年からは優良牧草を確保するため白河の農林省種畜牧場の指導で次のような五種類の混播牧草畑を三反歩つくつている。

厩肥を思い切つて施す

肥料 私の家は長い間無家畜農家であつたから土地は全く荒廃していた。そこで厩

種 別 播種量(反当)

- オーチャードグラス 二封度
- イタリアンライグラス 〇・五
- ペレニアライグラス 〇・七
- 赤クロバリ 一・五
- ラデノクロバリ 〇・五

肥を増産して大量に施肥することが必要だと考え、あらゆる農場残物、落葉、稲藁等を余すことなく投入した。酪農をはじめた二十二年に手持ちの材料で五坪の牛舎を新築し二十三年に七・五坪を増築、そして二十四年にはついに三頭収容できるコンクリート床の改良牛舎をつくり、同時に堆肥舎十二坪と六尺立方の尿溜を完成した。

一握りの糞も、一滴の尿も無駄なく私の「肥料工場」を通じて圃場へ運ばれた。その後一年毎に圃場は地力を増し、作物は増収していった。その結果二十八年、二十九年の冷害にもうちかつて平年並みの収穫が出来た。酪農をはじめ前の二十一年には米の反収四俵をそこで、二十五年には反当硫安九貫、過石十一貫、加里一貫の金肥を施して六俵の収穫であったのが、三十年には硫安四貫、過石六貫、加里三貫というように加里を除くほかは半分足らずにもかかわらず、なんと約十俵の収穫をとることができた。

作業の重点をとらえ 畜力を利用

勞力 六月の田植、七月の水田除草と麦刈り、十月、十一月の稲刈り、麦播きというネコの手も借りたい農繁期と乳牛の管理を結びつけるのが非常に苦痛だった。そこでレンゲや青刈ライ麦のサンマーサイレーシをつくり、畜舎附近に乳牛の繋牧ができ

るようにラデノクロバーの畑をつくる一方、畜舎の構造を改善して簡単に牛の管理ができるようにし、モーターで揚水給水を行い、カッターを利用して老人や婦人手が僅かの勞力で乳牛管理が出来るように工夫



イタリアンライグラスの生育状況

って好結果だった。私の家族は九人だが、農業労働は私と妻の二人だけで、父は家畜の管理や子供の世話、母は助産婦なので殆どタッチしない。その上私は各種団体の仕事で飛び回っている。

従つていわゆる「一配り、二働き」で耕起、施肥、播種、収穫等の重点を捉え畜力利用を徹底してきた。たとえば水田では、苗代条播、本田並木植、裏作は簡単にカルチペーターを通してだけでライ麦をまいている。畑では風害、風蝕の防止をかねて二、三年に一度全面耕起するほかは大抵乳牛にカルチペーターを引かせて簡単に播種する。そのため二十四年までは年間臨時雇が多かつたのがグンとへり、二十七年には年雇の娘を一人置いて細かい仕事を手伝わせるだけとなり、三十年春にはこれも一切やめて小型の万能ハンドトラクター（メリーティラー式）を備えた。

この結果畑五反を開墾しながら夫婦二人で十分やつていけるようになった。乳牛の役利用もこれによつて現在では運搬作業だけとなった。

家族全員が毎日一合ずつ飲用

生活改善 どんなことがあつても一日一人一合は自家用にすることを忘れなかつた。

牛乳を自家飲用することにより家族全員が牛や牛乳を大切に取扱うことになつたばかりか、家中がみな健康で、わが家の家計簿には医療費は全くのゼロとなつてゐる。年間搾乳量も三十石となり二十五年、二十六年と幸いメスの仔が生れたので大いに助かつた。そこで二十六年から生活改善にとりかかりまず浴場、食堂を改善二十九年には農事用のモーターを利用して水道をつくり、水の給水は子供たちが楽しくやるようになった。このために使う電力料は超過分として月二〇〜三〇円位のものであつた。

（本稿は、日本酪農青年連盟主催の第三回酪農青年全国大会において東北ブロック代表として体験発表せられて最優秀賞を獲得せられた、郷 正光氏（三二歳、福島県石川郡石川町大字新屋敷）の発表要旨であります。周到な配慮で計画的総合的に酪農の正道を歩み、勞力の節減は勿論生活改善に迄及んだその努力と実績は真に大きく、深く敬意を表するとともにひろく酪農に励む同志の方々に御紹介申上げる次第です。）

堆肥讚歌

堆肥は肥料養分を
あたえる外に有機質
土の単粒構造を
団粒組織に改造し
水はけ肥もちを程よくし
軽い土には粘り気を
重い土からそれを取り
土の組織をよくかえる